

平成二十年度 中学校入学試験問題 国語

- ◆ 字数制限がある問題は、「、」「や」「。」も一字と数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私には一つ、自分の好奇心を呼び覚ます発見があった。お茶室というものが時代を経る中で、広い書院からだんだん小さく縮んでいって、最後は一坪だけの空間に至るという、その縮小の流れを見つけてハッとしたのだ。このお茶室の面積が縮小していく流れが、ある不思議な引力をもって見えたのである。

前から気になっていたことだが、^①懷石料理というものは、何故大きな器にホンの少々の食品を載せるのだろうか。

同様に、生花というものもおうおうにして、大きな器にホンの一輪の花をずっと斜めに生けたりする。そんなことが何故か気にかかっていた。

懷石料理がほんの一口の分量を大きな器に入れてあること、それを経済要素から見れば貧乏性である。大きな花器に花一輪も同じことだと思う。ヨーロッパでは花はたくさんあるほど美しく、それが豊かさの表現となっている。それに対して一輪の花で満足しようというのだから、これは貧乏性の美学というより、（ １ ）貧しさの美学、といった方がいいのかもしれない。しかしお茶室の縮小していく流れには、ただ経済からの解釈による貧乏性とは違う別の引力があるのではないか、という印象があるのだった。

懷石料理というものは、利休たちの茶の湯の世界が究められていく過程で生れたものだ。つまりお茶を飲むために、その事前運動として料理を食べる。

私たちがいまふつうに飲む煎茶にしても、まず食事をすませたその後に、ゆつくりと飲むものである。（ ２ ）茶の湯でいうお茶とは抹茶である。お茶の葉を搥って粉にしたものを、そのままお湯に溶かして飲むのだから、ずいぶん濃い。それでも薄茶と濃茶とあって、お濃茶というのはほとんどドロドロである。カフェインであるから、空っぽの腹には相当こたえる。何か食べたあとの満たされたお腹でなければ受けとめられない。そこでお茶の前には必ずお茶受けのお菓子が出るわけで、そのお茶受けをさらに強化したものとして懷石料理があらわれてくる。

つまり食欲を満たすための食事ではなく、あくまでお茶に至るための食事であるから、分量的には最低限のものでいいわけである。しかしそうやって生れた極小の懷石料理が、お茶という最終目標を失ったところでもなお美しい料理として崇められていく。そういう美意識がこの国にはあるのだった。

その極小を愛でる美意識が、貧乏性と重なってあるのである。そもそもディテールへの愛というものが、基礎的な感性としてあるのだ。

（ ３ ）大和心のシンボルともいわれるサクラというもの、漢字ではこれを櫻と書く。櫻という字には、まとう、めぐらす、とりまくという意味があるという。中国ではサクラの花がぐると木をとりまいて咲く全体像を見て櫻という文字が出来ているのだ。

それでは漢字が伝わってくる前、サクラという和音による呼び名にはどのような意味があるのか。日本語の古訓でサクの音のものは裂、割、剣、その他、いずれも「二つに分かれる」という意味を持っているという。

おそらく桜を見てサクラと発音していた古代の日本人たちは、桜の花びらを見つめていたのであろう。ご存知のように桜の花びらの先端には小さな切れ込みがあり、M字形となっている。花びらの先が二つに分かれる。つまり大陸の人々は茫洋とビシクの固まりに包まれた桜の木の総体を見ていた。そして列島日本人は、散った桜の花びらの一つを掌に載せて、その先端部分に見入っていたのである。

そもそも日本人の崇める神さまたちは、自然の風物の樹や、石や、動物の一つ一つに宿っているわけで、自然のディテールを愛でる感性はこの列島の条件として備わっていたものなのだろう。

おそらくそのような感性は、この国の人々に、自然に、無自覚的にあったのだと思う。

森林の文化というものがあり、それが日本的感性の温床だといわれている。砂漠、草原の文化に対して、身を潜ませる木陰の文化のことであるが、

「A」

といって議論の中に身を潜ませる現代の私たちも、引きつづき森林に生きているのだ。

これは建築家・原広司との対談で知ったことだが、彼は集落の研究で世界を歩いていて、砂漠の文化と木の文化の違いを自覚せざるを得なかったという。木が生えていると人は態度をはっきりさせない。木にごまかされて境界があいまいになる。木がなくなるといろんなものが見えて、理性的になってくる。砂漠に一人立てば、自己を強く意識し、主張することで生きていくほかはない。

同様のことを画家の河原温とも話したことがある。欧米人に対して日本的感性についての説明をするのに苦勞するという。それはほとんど不可能に近いが、その一つの方法として、^②日本には一がないという説明をする。西欧にはまず一がある。そして二があり、三があつて人間の世の中がある。(4) 人と人の対話がそうだ。日本にはそのような強い自己としての一がなく、むしろ自分と相手との関係線がまず棒のようにあり、この横棒の上を互いのウェイトが行ったりきたりする。つまりその関係線としての横棒が、自己の一よりむしろ強くあるのであつて、それが西欧での一のような基本となっている。

これも私たちには非常に納得しやすいもので、西欧の人にはどう感じられるだろうか。

「それはワシのものだ！」

と自己主張してこそ生きていける砂漠、草原の文化人は、当面何の役にも立たないディテールに拘泥することよりも、世の中の中心を握るための闘争心を磨くのである。そこに向かう合理主義は、とりあえず貧乏性に寄り道する余地はないだろう。

それに比べて森林列島の文化人は、ことさら自己主張をしなくても棲息できる母性的湿度にいつも包まれている。だから自分の身を潜ませたところで、小さな花びらの先端に見入っていただけるわけなのである。自分自身をも自然のディテールとして潜ませる、そんな作法は、ある意味ではこの風土の豊かさをあらわしている。島国の中でのつつましい豊かさということだけど、それがここに発生した意識の自然なのだ。つまり無意識的な感性として備わっていたことなのである。それを意識して、極小の美を一つの思想として究めていったのは最近のことである。つまりそれが千利休の時代だと思うのである。

(赤瀬川 原平「千利休 ― 無言の前衛」)

〈注1〉崇められて……神聖なもの、絶対的なものとして尊び敬われて

〈注2〉ディテール……全体の中の細部

〈注3〉茫洋と……広々として限りのないようす

〈注4〉温床……ある結果を生みだす原因となる環境やことがら

〈注5〉ウェイト……重点・重要度

〈注6〉拘泥……こだわること

〈注7〉棲息……人間や動物が生きながらえて、そこで生活すること

園 学 合 百 白

問一 ――線①「懐石料理というものは、何故大きな器にホンの少々の食品を載せるのだろうか」とありますが、この疑問に対して二つの答えがあります。それぞれ本文中の言葉を使って説明しなさい。

問二 ～～線 a 「おうおうにして」・～～線 b 「こたえる」の文中の意味としてもっともふさわしいものをそれぞれ次のア～エから選び、記号で答えなさい。

a	おうおうにして	ア	いきなり	b	こたえる	ア	刺激が強い
		イ	いつも			イ	苦く感じる
		ウ	ときどき			ウ	返事をする
		エ	おそらく			エ	満腹感がある

問三 (1) (4) に入る最も適切な語を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア まして イ たとは ウ まず エ むしろ オ つまり

問四 A に入る最も適切な文を次のア～エから選び、その記号を答えなさい。

- ア どなたかやったださるかたはいませんか。
- イ いいえ、私などはとても……。
- ウ ○○さんがするのなら、私もします。
- エ ぜひ私にさせてください。精一杯努力します。

問五 ――線②「日本には一がないという説明をする。西欧にはまず一がある」とありますが、ここで言う「一」とは何ですか。その内容を表す言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問六 ――線③「貧乏性に寄り道する」とありますが、具体的にはどのようなことですか。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問七 ――線④「この風土の豊かさ」とありますが、筆者はこの国のどのようなところに「豊かさ」を感じているのですか。九十字以内で説明しなさい。

次の文章は、正月にお城で行われる鼓くらべ（鼓の腕を競う大会）にお留伊が競争相手のお宇多と共に参加した場面です。文章を読んで、後の問いに答えなさい。

金沢城^{（きんざわ）}二の曲輪^{（まがわ）}に設けられた新しい楽殿^{（がくでん）}では、城主前田侯^{（さきあたこう）}をはじめ重臣たち臨席のもとに、嘉例^{（けいれい）}の演能を終わって、すでに、鼓くらべが数番も進んでいた。

これにはいろいろな身分の者が加わるので、城主の席には御簾^{（ごれん）}が下ろされている。お留伊は、ひかえの座^{（ざ）}からその御簾の奥^{（おく）}をすかし見しながら、幾度^{（いくたび）}も総身^{（そうみ）}のふるえるような感動を覚えた。

……しかし、それは気後れ^{（きごれ）}がしたのではない。楽殿の舞台で次々に披露^{（ひひょう）}される鼓くらべは、まだどの一つも彼女をおそれさせるほどのものがなかった。彼女の勝ち^{（かち）}は確実である。そして、あの御簾の前に進んで賞を受けるのだ。遠くから姿を拝んだこともない大守^{（だいしゅ）}の手で、一番の賞を受けるときの自分を考えると、そのほこらしさと名誉^{（めいよ）}のかがやかしさに身がふるえるのであった。

やがて、ずいぶん長い時がたつてから、ついにお留伊の番がやってきた。

「落ち着いてやるのですよ。」師匠^{（ししょう）}の仁右衛門^{（にえもん）}は、自分のほうでおろおろしながらくり返して言った。「……御簾の方を見ないで、いつもけいこするときと同じ気持ちでおやりなさい。大丈夫^{（だいじょうぶ）}、大丈夫きつと勝ちますから。」

お留伊は、^①静かに微笑^{（わいしょう）}しながらうなずいた。

相手はやはり、能登屋^{（ののや）}のお宇多であった。曲は「真ノ序^{（まのじ）}」である。……拝礼^{（はいれい）}を済ませて、お留伊は左に、お宇多は右に、互いの座をしめて鼓をとった。

そして、曲が始まった。お留伊は自信をもって打った。鼓はその自信によくこたえてくれた。使い慣れた道具ではあったが、かつてそのときほどココロヨク鳴り響^{（ひび）}いたことはなかった。……三ノ地へかかったとき、早くも十分の余裕^{（よゆう）}をもったお留伊は、ちらと相手の顔を見やった。

お宇多の顔はあおざめ、そのくちびるは引きつるように片方へゆがんでいた。それは、どうかして勝とうとする心をそのまま絵にしたような、激しい執念^{（しつねん）}の相であった。

そのときである、お留伊の脳裏^{（のうり）}にあの旅籠師^{（りやうろうし）}の姿がうかがい上がってきた、ことに、いつもふところから出したことのない左の腕が！ ——あの人は観世市之丞^{（かみせいちのうぢ）}様だった。

お留伊はがくぜんとして、夢から覚めたように思った。

老人は、市之丞が鼓くらべに勝った後で自分の腕を折り、それも鼓を持つほうの腕を、自ら折って行方^{（ゆくえ）}をくらましたと言ったではないか。……いつもふところへかくしている腕が、^②それだ。——市之丞様だ。それにちがいない。

そう思う後から、目の前に老人の顔があざやかなまばろしとなつてえがき出された。それから、あの温雅^{（おんが）}な声が、耳もとではっきりこうささやくのを聞いた。……音楽はもっと美しいものでございます。

お留伊はふり返った。そしてそこに、お宇多のけんめいな顔を見つけた。^③ひとみのうわずった、すでに血の気を失ったくちびるを片方へ引きゆがめている顔を。

——音楽はもっと美しいものでございます。人と優劣^{（りゆうりゃく）}を争うことなどおやめなさいまし。音楽は人の世で最も美しいものでございます。老人の声が再び耳によみがえってきた。……お留伊の右手がはたと止まった。

お宇多の鼓だけが鳴り続けた。お留伊はその音色と、^bイガイな出来事に驚いている客たちの動揺^{（どうご）}を聞きながら、鼓を下ろしてじっと目をつむった。老人の顔が笑いかけてくれるように思え、今まで感じたことのない、新しい喜びが胸へあふれてきた。そして、自分の体が目に見えぬいましめを解かれて、やわらかい青草^{（せいそう）}の茂っている広い広い野原へでも^cカイホウされたような、軽い生き生きとした気持ちでいっぱいになった。

——早く帰ってあの方に鼓を打ってあげよう。この気持ちを話したら、きっとあの方は喜んでくださるにちがいないわ。お留伊はそのことだけしか考えなかった。

「どうしたのです。」舞台から下りてひかえの座へもどると、師匠はすっかり取り乱した様子でなじった。「……あんなにうまくいったのに、なぜやめたのです。」

「^A打ち違えたのです。」

「そんなばかなことはない。いや、そんなばかなことは断じてありません。あなたはかつてないほどお上手に打った。私は知っています、あなたは^B打ち違えたりはしなかった。」

「私、打ち違えましたの。」お留伊は微笑しながら言った。「……ですから、やめましたの。すみませんでした。」

「あなたは打ち違えはしなかった、あなたは。」

仁右衛門はやっきとなって、同じことを何十回となくくり返した。

「……あなたは打ち違えなかった。そんなばかなことはない。」と。

父や母や、集まっていた親族や知人たちにも、お留伊はただ、自分が失敗したと告げるだけであった。だれが賞をもらったかということも、もう^dキョウミがなかった。ただ少しも早く帰って老人に会いたかった。森本へ帰ったのは正月七日の暮れ方であった。つかれてもいたし、^e粉雪がちらちらと降っていたが、お留伊はだれにも知れぬように裏口から家を出ていった。

「まあ、お嬢様——」

松葉屋の少女は、不意に訪ねてきたお留伊を見て、驚きの目をみはった。……そしてすぐ、きかれることは分かっているというふうに、

「あのお客様は亡くなりました。」と、当たり前すぎる口調で言った。「……あれからだんだんと病気が悪くなるばかりで、とうとうゆうべお亡くなりになりました。おとむらいは明日だそうでございます。」

お留伊は裏の部屋へ通された。老人は、^f貧しい櫛のつばと、細い線香の煙に守られていた。……お留伊は顔の布をとってみた。おとろえきつた顔であった。つぶさになめてきた世の^g辛酸が、刻まれているしわの一つ一つにしみこんでいるのであろう。けれど、今すべては終わった。もうどんな苦しみもない。^eコンナンな長い旅が終わって、老人は今安らかな、目覚めることのない眠りの床についているのだ。

——ようなさいました。

お留伊には老人の死に顔が、そう言っただけで微笑するように思えた。

——さあ、私にあなたのお手並みをきかせてくださいまし。

「私、お教で目があきましたの。」お留伊はささやくように言った。「……それで、いろいろなことが分かりましたわ。今まで自分がどんなにみにくい心を持っていたか、どんなに思い上がった、たしなみのない娘であったか、ようやくそれが分かりましたわ。それで、急いで帰ってきましたの。お目にかかつてはめていただきたかったものですから。」

お留伊のほおに、初めて温かいものがしたたった。それから長い間、^h袂で顔をおおいながら声をしのばせて泣いた。……長い間泣いた。

「今日こそ、本当にきいていただきます。」やがてⁱ涙を押しぬぐって、お留伊は^h袂紗を解きながらささやいた。「……今までのようにではなく、生まれ変わった気持ちで打ちます。どうぞおききくださいまし、お師匠様。」

今はもう、老人は観世市之丞であるかどうか確かめるすべはない。けれど、^⑤お留伊は固くそう信じているし、またよしそうでないにしても、その老人こそ彼女にとっては本当の師匠であった。

部屋はもう暗かった。……お留伊は、老人の枕辺に^j端座して、心を静めるようにしばらく目を閉じていた。……南側のすすけた障子にはのかなたそがれの光が残っていて、それが彼女の美しい横顔の線を、暗い部屋の中にまばろしのごとくえがき出

した。

「いやあ——。」

こうして、鼓は、よくすんだ、莊嚴でさえある音色を部屋いっぱいに反響させた。……お留伊は「男舞」の曲を打ち始めた。

(山本 周五郎「鼓くらべ」)

〈注1〉二の曲輪……本丸(城の中心になる部分)のとなりにある二の丸のこと

〈注2〉楽殿……音楽を演奏する建物

〈注3〉嘉例……めでたい先例・吉例

〈注4〉御簾……へりを付けた、目の細かいすだれ

〈注5〉太守……一国以上を領地として持っていた大名のこと

〈注6〉温雅……穏やかで、上品なこと

〈注7〉椿……仏前に供えたりする常緑樹の一つ

〈注8〉辛酸……つらい苦しみ、苦い経験

〈注9〉袱紗……鼓をおおっている、方形の絹の布

〈注10〉端座……正座

問一 ——線①「静かに微笑しながらうなずいた」とありますが、この時のお留伊の気持ちを説明したものとして、最も適切なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 順番を待っている間、他人の演奏を聞いて弱気になったが、師匠の言葉をきき少し自信を取りもどした。

イ おろおろしながらも自分を懸命にはげまそうとする師匠の姿を見て、安心させようと余裕を見せた。

ウ 勝つことだけが考えていない師匠をおろかな人だと思いつつも、同意したふりをした。

エ 師匠から「きつと勝ちます」と言われて、一番の賞を受ける自分を想像し、ふるえるような喜びを感じた。

オ これまでの鼓くらべをきいていて自分が勝つことを確信したため、自信に満ち、落ち着いていた。

問二 ——線②「それ」とは何を指していますか。三十字以内で答えなさい。

問三 ——線③「ひとみのうわずつた、引きゆがめている顔」とありますが、このお宇多の表情にはどのような気持ちが表れていますか。十五字以内で本文中から抜き出して答えなさい。

問四 ——線④「目に見えぬいましめ」とありますが、それはどのようなものが答えなさい。

問五 〰線A「打ち違えたのです」・〰線B「打ち違えたりはしなかった」とありますが、それぞれどのような意味で発言したのですか。説明しなさい。

問六 ——線⑤「お留伊は固く、師匠であつた」について、お留伊がこの老人を観世市之丞であるなしにかかわらず「本当の師匠」だと思ったのはなぜですか。六十字以内で答えなさい。

問七 〰線a～eのカタカナを漢字に直しなさい。送りがなの必要なものは送りがなも書きなさい。